

不特定多数の覚者達

——浄土經典に見られる buddha の用例——

平 岡 聡

はじめに

仏教学とは文字どおり「仏教」を研究対象とする学問である。そしてその仏教とは「仏の教え」に他ならない。この場合「仏 (buddha)」とは√budh (目覚める) の過去受動分詞であり、名詞化して「目覚めた人」を意味するようになり、本来は普通名詞であるが、固有名詞化された場合には仏教の開祖である釈尊、即ちガウタマ・シッダールタ (Skt. Gautama Siddhārtha; Pali. Gotama Siddhattha) を意味する呼称となる。ところが実際に初期經典や部派の仏典に目を通してみると、この buddha という用法は意外に少ないことに気づく。では実際に初期經典や部派の仏典でガウタマ・シッダールタがどのように呼ばれているかということ、bhagavat という呼称の方が一般的であり、これと比較すれば buddha の用法は相対的に少なくなっている。

初期經典で buddha と言えば、通常ガウタマ・シッダールタだけを意味し、それ以外に buddha は存在しないことになっているが、大乘經典になると、仏陀觀にも大きな変革が起こって一仏から多仏へと移行し¹⁾、大乘經典ではガウタマ・シッダールタ以外にも数多くの Buddha が登場することは言うまでもない。大乘經典の中でも浄土經典の占める位置は重要であり、ここには阿弥陀という新たな buddha も登場する

1) 仏陀觀の変遷に関しては以下の研究を参照されたい。高原信一「マハーヴァスツに表れた佛陀觀」(『印度学仏教学研究』6-1, 1958年) 124-125頁。金児慧「マハーヴァスツの研究—その佛陀觀をめぐって—」(『龍谷大学大学院紀要(文学研究科)』5, 1983年) 118-121頁。梶山雄一「佛陀觀の変遷」(『佛教大学総合研究所紀要』3, 1996年) 5-46頁。藤田宏達『原始浄土教の研究』岩波書店, 1970年, 365-376頁。静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』百華苑, 1974年, 35-36頁。平川彰『初期大乘仏教の研究 I』(平川彰著作集第3巻) 春秋社, 1989年, 293-296頁。平岡聡「アヴァダーナ文獻に見られる佛陀の誓願とその問題—√tṛ の causative (並川説) を手がかりとして—」(『印度学仏教学研究』45-1, 1996年) 118(405)-1122(401)頁。平岡聡「佛陀觀の変遷—Divyāvadāna と Mahāvastu との比較—」(『印度学仏教学研究』46-1, 1997年) 130(391)-134(387)頁。

のは周知の事実である。この阿弥陀に対する帰依を「南無阿弥陀仏」と表現し、これを唱えることを「念仏」と言い、中国や日本においては重要な仏教の実践の一つになっているが、しかしながら浄土經典を繙いてみると、面白いことに阿弥陀が buddha と呼ばれている箇所は散文の中には何処にも存在しないのである。

そこで本稿では浄土經典に見られる buddha の用法を整理して若干の考察を加えてみたい。ここでは Skt. の原語を問題にしているため、Skt. 原典の存在が確認されていない『観無量寿經』は考察の対象から外し、無量寿經と阿弥陀經との Skt. 原典を中心にその用例を検討していく。またここでは buddha という呼称そのものを問題にしているため、本稿では「目覚めた人 (buddha)」のことを総称して「覚者」という呼称を用いることにする。

1. 無量寿經梵本における用例

覚者には様々な呼称があり、通常「如来の十号」という言葉で知られているように、十の異なった呼称があるという²⁾。即ち、

- ①如来 (tathāgata)
- ②阿羅漢 (arhat)
- ③正遍知 (samyaksambuddha)
- ④明行足 (vidyācaraṇasaṃpanna)
- ⑤善逝 (sugata)
- ⑥世間解 (lokavid)
- ⑦無上士 (anuttara)
- ⑧調御丈夫 (puruṣadāmyasārathi)
- ⑨天人師 (śāstā devamanuṣyāṇām)
- ⑩仏・世尊 (buddha bhagavat)

という十の呼称である。この切り方や十の数え方には様々な問題があり、最後の「仏世尊」を「仏」と「世尊」に分ければ、全部で十一号となってしまうが、とにかく覚者にはこのような呼称が存在する。

無量寿經の梵本である L. Sukh.³⁾ には様々な覚者が登場する。先ずはガウタマ・シ

2) 「如来の十号」に関しては、以下の研究を参照されたい。藤田宏達「仏の称号 十号論」(『玉城康四郎博士還暦記念論集 仏の研究』春秋社、1977年) 81-98頁。

3) Atsuuji ASHIKAGA, *Sukhāvativyūha*, Kyoto:Hōzōkan, 1965.

ッダールタ、また経典の主人公となるアミターバ、あるいはアミターユス、それに彼の師匠であるローケーシュヴァラ・ラージャ等が主な覚者であるが、では彼らが今上げた十のうち、どのような呼称で呼ばれ、また buddha という呼称はどのような場合に用いられるのかという問題を検討してみよう。

【1】 Gautama Siddhārtha

まず仏教の開祖ガウタマ・シッダールタの用例から検討してみよう。先程指摘したように彼が buddha と呼ばれることはなく、bhagavat という呼称が用いられるのが普通であるが、この他にガウタマ・シッダールタの呼称としてよく用いられるのが tathāgata である。これには他者が彼のことを呼ぶ場合と、一人称として彼が自分のことを呼ぶ場合の二つの違った用法があるが、それらの用例は次の通りである。

bhagavat : 52回⁴⁾

tathāgata (アーナンダが釈尊にたいして) : 6回 (3.5, 8, 9, 19, 20, 34.9)

tathāgata (一人称) : 14回 (4.7, 10, 11, 12, 15, 17, 5.1, 3, 28.2, 6, 9, 54.14, 16, 18)

この他に1回だけ「シャーキャムニ如来」と呼ばれる場合があるが (56.15)、これで総てであり、今問題としている buddha という呼称は彼には一度も用いられていない。

【2】 Dīpaṃkara

では次に燃灯仏授記でお馴染みの Dīpaṃkara がどのように呼ばれているかを纏めてみよう。この覚者の L. Sukh. における登場回数は僅かである。

tathāgata・arhat・samyaksambuddha : 1回 (5.10)

tathāgata : 1回 (66.13)

この二つの用例があるのみで、ここでも彼が buddha という呼称で呼ばれることは一度としてない。

【3】 Lokeśvararāja

次に主人公の阿弥陀の師匠に当たる Lokeśvararāja の場合はどうであろうか。登場回数は当然のことながら Dīpaṃkara よりも多くなる。以下、その用例を纏めてみよう。

4) 余りに煩雑なので、その出典はいちいち列挙しない。

tathāgata・arhat・samyaksambuddha：3回 (6.20-21, 24-25, 9.10-11)

bhagavat・tathāgata：6回 (7.2-3, 8.20-21, 9.4, 21, 10.3-4, 23.18-19)

bhagavat：57回 (7.3, 8.22, 9.7², 17, 22, 10.7, 8, 16², これに加えて47の
各願文中に1回ずつあるが、煩雑なために出典は省略)

tathāgata：1回 (10.10)

このように散文中では buddha という呼称が彼に対して使われることはないが、韻文中にはダルマーカー比丘が彼のことを buddha と呼ぶ例が1回 (8.14) だけ存在する。

【4】 Amitābha, Amitāyus

では次にこの經典の主人公となっている Amitābha と Amitāyus とが如何なる呼称で呼ばれているかを纏めてみよう。先ず固有名詞を出さずに bhagavat 単独で用いられるのが4回 (28.8, 29.13, 29.21, 42.15), 同じく固有名詞を出さずに tathāgata 単独で用いられるのが9回 (26.12, 13, 29.22, 30.11, 35.19, 42.9, 22, 43.3, 9) ある。次に固有名詞が付くケースであるが、これを Amitābha と Amitāyus とに分けてその用例を纏めると、以下のようになる。

① Amitābha

bhagavat・tathāgata・arhat・samyaksambuddha：2回 (54.21-22, 56.10,)

tathāgata・arhat・samyaksambuddha：7回 (26.17, 42.13, 25, 55.11, 55.24-25, 58.8, 62.19)

bhagavat・tathāgata：5回 (27.3, 6-7, 29.15-16, 41.25-43.1, 63.13)

tathāgata：11回 (27.14, 28.3, 10, 22-23, 42.5⁵), 18, 43.9, 16, 20, 62.11, 16)

bhagavat：2回 (30.2, 66.9)

② Amitāyus

bhagavat・tathāgata・arhat・samyaksambuddha：2回 (47.10-11, 60.20-21)

5) 足利刊本では tasya 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyam (42.5) とあるが、マックス・ミューラー刊本と大谷光瑞刊本によれば、ここは tasya bhagavato 'mitābhasya nāmadheyam (香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』永田文昌堂, 1984年, 246頁) となっており、藤田宏達はその翻訳において二つの読みを合わせて tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyam (藤田宏達『梵文和訳無量壽經・阿弥陀經』法藏館, 1975年, 左33頁) と訂正している。いずれの読みを採用するにせよ、ここでは Amitābha が buddha と呼ばれていないことが確認できればよいのであるから、今は足利刊本の読みを採用しておく。

bhagavat・tathāgata：1回 (29.24-25)

tathāgata：2回 (51.1, 66.14)

また奇妙な用例であるが、「かのアミターバ、アミタプラバ、アミターユス如来・応供・正等覚者 (bhagavantam tam amitābham amitaprabham amitāyusaṃ tathāgatam arhatam samyaksaṃbuddham)」という用例が1回 (55.7-8) だけ存在する。

では彼が buddha と呼ばれる用例は存在しないかというと、ローケーシュヴァラ・ラージャの時と同じように、彼に buddha を冠するケースが僅かに見られる。単独で buddha と呼ばれる例が3回 (45.4, 13, 46.11), また Amitāyus に buddha を冠する例が3回 (44.3, 11, 46.18) ある。ところがこれら総ての用例は先程の例と同じく韻文の中にのみ存在し、散文中には一度も見ることが出来ないのである。これに関しては後ほど改めて考察を加えるとして、ここでは用例の紹介に留めたい。

【5】 その他の覚者（固有名詞のあるもの）

今までに見てきた覚者の他にも固有名詞を伴った覚者が L. Sukh. には少なからず登場する。まず釈尊がアーナンダに対してこの経典を説き始める導入部分に、ディーパンカラから遡ってローケーシュヴァラ・ラージャに行き着くまで、順次覚者の名前が数え上げられる箇所があるが、その最初の部分に、プラターパヴァット、プラバーカラ、チャンダナガングダ、スメールカルパという覚者が登場しており、彼らは皆、tathāgata という呼称で呼ばれている (5.11, 12, 13-14, 14-15)。

また最後の部分では、様々な覚者のもとから大勢の菩薩が極楽世界に生まれ変わることを説く箇所があるが、そこに説かれる14人の覚者も総て tathāgata という呼称で呼ばれており (61.6, 8, 11, 13, 15, 17, 19, 21, 23, 25, 62.1, 3, 7, 9), 彼らが buddha と呼ばれることはないのである。

以上、固有名詞を有する覚者が L. Sukh. においてどのような呼称で呼ばれているかを紹介してきたが、では L. Sukh. に buddha の用例があまりないかというと、事実全くその逆で多数の用例が存在している。そこで次に L. Sukh. に見られる buddha の用例を検討する。ここでは buddha 単独で用いられるケースと、buddha が bhagavat と共に用いられるケースとに分けてその用例を紹介してみたい。

①過去・未来・現在の一切の仏・菩薩・聖なる声聞・独覚達に帰命いたします (1.1-3)。

②〔私〕はガンジス河の砂のように無限なる、百千・コーティという多くの仏達

を〔中略〕供養するであろう（7.25-8.3）。

③ローケーシュヴァラ・ラージャ如来・阿羅漢・正等覚者は〔中略〕八十一の百千・コーティ・ナユタ倍という仏達の仏国土の功德の嚴飾と莊嚴の成就を、様相や説明や解釈をつけて説き明かされた（9.10-16）。

④ダルマーカラ比丘はこれら八十一の百千・コーティ・ナユタ倍という仏達の仏国土の功德の嚴飾と莊嚴の成就を総て一つの仏国土に収めとって、〔中略〕かの世尊のもとから退いた（9.18-22）。

⑤第二十一願：かの仏国土に生まれるであろう有情達が（中略）一切の仏達を恭敬しようと欲し、（中略）一生所繫とならないようであったら、その間、私は無上正等菩提を正等覚しません（14.13-23）。

⑥第二十二願：かの仏国土に生まれるであろう菩薩達が（中略）食前の間に、他の諸々の仏国土に行って、何百という多くの仏達、何千という多くの仏達、何十万という多くの仏達、何千万という多くの仏達、乃至十万・百万・千万という多くの仏達に、安樂のために必要な一切のものを以て仕えないようであるならば、その間、私は無上正等菩提を正等覚しません（14.24-15.7）。

⑦ガンジス河の砂のように、東方には、それだけ多くの、諸々の仏達の国土がある（44.1-2）。

⑧彼らは早く大急ぎで極樂世界に行け。そしてアミタ・プラバの前に行って、千・コーティもの仏達を供養せよ。〔千〕コーティもの多くの仏達を供養して、（中略）食前には極樂に戻るであろう（47.2-9）。

⑨かの仏国土に生まれた菩薩達は（中略）欲する限り、百千・コーティ・ナユタという多くの仏達に仕える（50.2-4）。

⑩そこで広大な喜びと歡喜とを生じ、広大な心の喜びを得る者達は、無量・無数という多くの善根を植え、百千・コーティ・ナユタという多くの仏達に仕えた後、一午前の中に、再び極樂世界に戻ってくるのである（50.23-27）。

⑪彼らは百千・コーティ・ナユタという多くの仏達のもとで善根を植え、（中略）諸々の常住の法に専心している（54.4-11）。

⑫私は（中略）百千・コーティ・ナユタという多くの仏達のもとで善根を植えた彼ら菩薩・大士達を見たいのです（55.6-9）。

⑬百千・コーティ・ナユタという多くの仏達に仕え（中略）るべきであったのに、彼ら（極樂世界に生まれることに疑いを起こした菩薩達）は疑いの過ちによってその総てを失っているのだ（60.11-15）。

- ⑭〔菩薩達〕は百千・コーティという多くの仏達のもとで植えた諸々の善根によって、完全に〔目的を〕成就し、退転しないのである（61.3-4）。
- ⑮〔善根を植えた有情達は〕一切の仏達に賞賛され、一切の仏達に称揚され、一切の仏達に承認される（63.20-21）。
- ⑯下劣で、怠惰で、〔邪〕見を持つ者達は、仏達の諸法に対し浄信を得ることが出来ない。前世の仏達に供養をした者は、世間の主達の諸々の行を学んだ（64.25-65.1）。
- ⑰仏は仏の諸々の功德を知る（65.6）。
- ⑱もしも有情達が善逝となって（中略）千万劫の間、一人の仏の諸々の功德を語るとしても、仏智の量は計り得ない（65.10-16）。
- ⑲〔賢明で分別ある人は〕「仏達は知っておられる」⁶⁾という声を発するであろう。ある時には人間の身が得られ、ある時には仏達の出現もある（65.21-23）。
- ⑳覚りを求めて意欲を起こした仏達は、過去世において私の友であったのだ（65.28-29）。

続いて buddha が bhagavat と共に用いられる用例を紹介しよう。

- ①「善いかな、善いかな、アーナンダよ。だが神々がお前にそのことを告げたのか。あるいは諸仏・諸世尊が〔告げたのか〕。それとも自分自身の思慮の智によってそう知ったのか」。こう言われて、同志アーナンダは世尊にこう申し上げた。「世尊よ、神々がこのことを私に告げたのでも、諸仏・諸世尊が〔告げたの〕でもありません。（中略）今日、如来（釈尊）は（中略）過去・未来・現在の一切の諸仏・諸世尊のことを考えておられるのだ、と自分自身の思慮の智だけによってこう思ったのです」（3.13-4.1）
- ②'第十七願：世尊よ、もしも私が覚りを得た時に、無量の仏国土における無量・無数の諸仏・諸世尊が〔私の〕名前を賞賛（中略）しないようであったなら、その間、私は無上正等菩提を正等覚しません（13.17-21）。
- ③'第二十五願：世尊よ、もしも私が覚りを得た時に、（中略）かの仏国土における菩薩達にく（中略）無量・無数の仏国土における諸仏・諸世尊を敬い、尊重し、尊敬し、供養したい」という心が起きたとして、彼らにその心が起きると同時に、かの諸仏・諸世尊が憐れんでそれを受け入れないようであったなら、その間、私

6) ここは韻文であり、足利刊本によると、buddha prajānāti とある。これを藤田は龍大寫本の所伝を尊重し、prajānāti を prajānā ti に補正し、これに伴って、buddha を複数・主格と理解しているの、ここでもこの理解に従い、ここでの buddha を複数とする（藤田前掲書228頁の注）。

は無上正等菩提を正等覚しません (15.22-16.7)。

④'第四十一願：世尊よ、もしも私が覺りを得た時に、(中略) その他の仏国土に住する菩薩達が私の名前を聞いて、聞くや否や、「よく分別した三昧」と名付けられ、その三昧に入った菩薩達なら、一刹那の間に、無量・無数・不可思議・無比・無限の諸仏・諸世尊を見るような、そのような三昧を得なければ、(中略) その間、私は無上正等菩提を正等覚しません (19.18-24)。

⑤'第四十四願：世尊よ、もしも私が覺りを得た時に、(中略) その他の諸世界における菩薩達が私の名前を聞いて、聞くや否や、「あまねく達せる三昧」と名付けられ、その三昧に入った菩薩達なら、一刹那の間に、無量・無数・不可思議・無比・無限の諸仏・諸世尊を供養するような、そのような三昧を得なければ、(中略) その間、私は無上正等菩提を正等覚しません (20.12-19)。

⑥'〔菩薩の行を実践しつつある者達によって〕その間に、無量・無数の諸仏・諸世尊が供養され (中略) た (25.5-6)。

⑦'〔また彼らによって〕その間に、無量・無数の諸仏・諸世尊が供養され (中略) たが、その〔仏達の数の〕際限を、言葉の働きによる説明で知るのは容易ではない (25.14-15)。

⑧'但し、前世の誓願の加護によって一尋の光明、(中略) 乃至十万・百万・千万・億・阿僧祇の多くの光明を以て〔この〕世間に至るまで満たしている諸仏・諸世尊を除く (27.7-12)。

⑨'アーナンダよ、〔お前〕は (中略) 諸仏・諸世尊の仏の加護が不可思議であることを会得していない (34.3-5)。

⑩'十方のそれぞれの方角にあるガンジス河の砂に等しき諸々の仏国土において、ガンジス河の砂に等しき諸仏・諸世尊はかの世尊アミターバ如来の名前を賞賛 (中略) する (41.25-42.3)。

⑪'今の私と同じように、五濁がある時に、諸仏・諸世尊が世間に出現する (49.22-50.1)。

⑫'〔かの仏国土に生まれた菩薩達は〕花や音楽を以てこれらの諸仏・諸世尊に供養をなし、(中略) そのような花束をこれらの諸仏・諸世尊にまき散らすのである (50.9-15)。

⑬'十方の世間に淀みなく響きわたったかの〔如来の〕かの名前を、それぞれの方角におけるガンジス河の砂に等しき諸仏・諸世尊が何度も何度も (中略) 賞賛するのである (55.1-5)。

⑮'世尊よ、どれほどの菩薩がこの仏国土から、あるいは他の諸仏・諸世尊のもとから完全に〔目的を〕成就して極楽世界に生まれ変わるのでしょうか（60.23-25）。

- ①一切の
- ②ガンジス河の砂に等しき
- ③八十一の百千・コーティ・ナユタ倍の
- ④百千・コーティ・ナユタという多くの
- ⑤無量・無数・不可思議・無比・無限の
- ⑥無量・無数の

7) buddha 或いは buddha・bhagavat 両方を合わせて35の用例が存在するが、このうち、単なる複数形として用いられているのが、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、そして㉖の10例に過ぎず、単数形で用いられている⑲と㉗を除けば、後の23例は何らかの形で「数の多さ」、しかも単に数が多というだけでなく、「途方もない数の多さ」を強調する形容句が付されていることになる。

ているのである。

従って、L. Sukh. では Amitābha, Amitāyus, Lokeśvararāja 等の固有名詞を有する覚者を言い表す時には、tathāgata, arhat, samyaksaṃbuddha, bhagavat 等の語を用いるのに対し、固有性や具体性を欠いた覚者を表現する場合には buddha あるいは buddha・bhagavat を使用するというように、かなりの確率で使い分けられていた形跡を読みとることが出来るのである。但し若干の例外として、固有性や具体性を欠いた覚者を表現するのに、

tathāgata・arhat・samyaksaṃbuddha：2回 (3.10-11, 4.8-9)

samyaksaṃbuddha：1回 (4.18)

tathāgata：8回 (4.20, 9.8, 17.12, 19.2, 40.9, 43.14, 64.6, 15)

という表現が使われる例もないわけではないが、buddha の用例に比べれば、その数は遥かに少ないと言えよう⁸⁾。

また L. Sukh. に見られる buddha の用法で特徴的なのは、この語がコンパウンド (ほとんどのケースが tatpuruṣa の genitive) の前分に用いられることが非常に多いということである。これに関しては今までここで考察してきた buddha の用法とは少し趣を異にするもので、紙面の都合上、また別の機会にこれについて考察を行うつもりである⁹⁾。

2. 阿弥陀経梵本における用例

ではこの傾向が果たして S. Sukh.¹⁰⁾ にも見られるのか、あるいは L. Sukh. だけの

8) これらの用例に関しては、この後の注16)を参照。

9) 少しだけ触れておくと、コンパウンド中に見られる buddha の用例で特徴的なのは、ここで考察したような「具体性・固有性を欠いた覚者」というよりは、「目覚めた人一般」を意味するような用法になっているということである。現段階では L. Sukh. に見られる用例を集めただけであり、具体的な個々の用例の検討には入っていないが、現在の感觸として、コンパウンド中の buddha はより観念的かつ抽象的な意味あいでも用いられている感がある。例えば、L. Sukh. に頻繁に出てくる buddhajñāna (仏智) というコンパウンドは「誰か特別な仏陀の持っている智」というよりは、「目覚めた人なら誰もが共通して持っている智」を意味し、また buddhacakṣus (仏眼) も「誰か特別な仏陀の持っている眼」というよりは、「目覚めた人なら誰もが共通して持っている眼」を意味していそうである。これらの用例は、本稿で見た buddha の用例と同じく、具体性・固有性を欠いているという点では同じであるが、しかし本文中で検討した buddha は具体性や固有性は希薄であっても、何らかの形でどこかに存在するものとして描かれていた。これに対して、コンパウンド中の buddha は先程少し紹介した若干の例からも分かるように、「具体性・固有性の欠如」が更に純化されて、その実在感すら否定され、全く観念的な意味で抽象概念として用いられているような印象を受けるが、詳しくは別の機会に譲る。

10) F. Max Müller and Bunyiu Nanjo, *Sukhāvati-vyūha, Description of Sukhāvati, the Land of Bliss* (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. I, Part II), Oxford, 1883, 92-100 (Appendix II. Sanskrit Text of the Smaller Sukhāvati-vyūha)

特徴なのかを確認するために、同じ手順で S. Sukh. に見られる buddha の用例を検討していくことにしよう。

【1】 固有名詞を有する覚者

S. Sukh. は L. Sukh. に比べると、その分量はかなり少ないので、ここでは「固有名詞を有する覚者」を一括して扱うことにする。

先ず Gautama Siddhārtha であるが、S. Sukh. における彼の呼称は一貫して bhagavat であり、4 回 (92.2, 93.1, 99.15, 100.1) の用例しか認められない。

続いて主役の阿弥陀であるが、先ず固有名詞を出さずに tathāgata 単独で用いられる例は 7 回ある。また S. Sukh. では Amitābha が tathāgata 等の呼称と共に用いられることはないで、Amitāyus に限ってその用例を纏めると、次のようになる。

Amitāyus

tathāgata · arhat · samyaksambuddha : 1 回 (93.3-4)

bhagavat · tathāgata : 2 回 (96.12, 99.8)

tathāgata : 5 回 (95.3, 96.4, 10, 16, 18)

また S. Sukh. の後半には六方の覚者達がそれぞれ「『この不可思議な功德の賞賛、一切の仏達の摂受』と名付くる法門を信受せよ」と説く箇所がある。ここで説かれる諸々の覚者達には、固有名詞が付けられている。即ち東方の五人 (97.1, 2³, 3), 南方の五人 (97.7, 8², 9²), 西方の六人 (97.14, 15³, 16²), 北方の七人 (97.21, 22², 98.1², 2²), 下方の六人 (98.7², 8², 9²), そして上方の十一人 (98.14, 15², 16³, 17, 18³, 19) に固有名詞が付されているわけだが、彼らは総て tathāgata という呼称で統一されている。

これから分かるように、S. Sukh. においても固有名詞を有する覚者は buddha と呼ばれていないことが確認された。

【2】 固有名詞を持たない覚者

では buddha と呼ばれる覚者は L. Sukh. と同じように、S. Sukh. においても固有性・具体性を欠いた存在として説かれているのであろうか。先程と同じ手順で、S. Sukh. における buddha の用例を抽出してみよう。ここでも buddha 単独で用いられるケースと、bhagavat と併用されるケースとに分けて見ていくことにする。先ず buddha 単独で用いられる用例である。

①そこに生まれ変わった有情達は一〔朝〕食前の間に、他の諸世界に行って、亘

千・コーティの仏達を礼拝し、(中略) 同じかの世界に戻ってくるのである (94.12-15)。

②〔東方の諸仏は〕「お前達は『この不可思議な功德の賞賛、一切の仏達の摂受』と名付くる法門を信受せよ」と明言している (97.12-13)¹¹⁾。

③シャーリプトラよ、これをどう思うか。如何なる理由でこの法門は『一切の仏達の摂受』と名付けられるのだろうか (99.1-2)。

④彼らは総て仏達に攝取される者となる (99.4)。

続いて buddha が bhagavat と併用される用例を紹介する。

①' 東方におけるガンジス河の砂の如き諸仏・諸世尊は舌を以て各々の仏国土をあまねく覆って「お前達は『この不可思議な功德の賞賛、一切の仏達の摂受』と名付くる法門を信受せよ」と明言している (97.3-6)¹²⁾。

②' 如何なる善男子・善女人であっても、この法門を聞き、またこれら諸仏・諸世尊¹³⁾の名前を憶持するならば、(中略) 無上正等菩提に対して退転しない者となるであろう (99.2-5)。

③' シャーリプトラよ、ここで〔お前達〕は私と彼ら諸仏・諸世尊とを信じよ、信受しよ、疑ってはならない (99.5-7)。

④' ちょうど私が今、彼ら諸仏・諸世尊の諸々の不可思議な功德を賞賛しているのと全く同じように、シャーリプトラよ、彼ら諸仏・諸世尊も私の諸々の不可思議な功德を次のように賞賛しているのだ (99.13-15)。

これらの用例でも buddha という語には下線で示したように「ガンジス河の砂の如き」、「一切の」、あるいは「百千・コーティの」といった数の多さを示す形容句が付されることでその固有性・具体性が隠蔽されてしまい、buddha という語で表現される覚者を「顔の見えない存在」にしているのが分かる。ここでもその覚者が具体性・固有性を有するか有しないかという基準で buddha という語の使い分けがなされていると見て大過はなかろう。これを端的に表現しているのが、S. Sukh. 後半の、いわ

11) この用例は、南方、西方、北方、下方、上方においても同様に繰り返される。

12) これも、南方、西方、北方、下方、上方において同様に繰り返される。

13) ここでの「諸仏・諸世尊」はコンテキストからして、その前に固有名詞入りで説かれた東・南・西・北・上・下の六方の諸仏を指すから、固有名詞付きの覚者が buddha と呼ばれているとも理解できるが、しかしこれら固有名詞付きで名前を出ている覚者はほんの一例として紹介されているのであり、六方総てにおいて、固有名詞付きの覚者が紹介された後には必ず「このような〔如来〕をはじめとして、ガンジス河の砂の如き諸仏・諸世尊は」とその数多き覚者の存在が強調されている。そのガンジス河の砂の如き「無数の」諸仏・諸世尊がここで意図されているわけであるから、ここではこれも具体性・固有性を欠いた buddha の用例と見ておきたい。

ゆる六方位である。例として東方のケースを見てみよう。

東方にはアクショービヤと呼ばれる如来、メール・ドヴァジャと呼ばれる如来、マハー・メールと呼ばれる如来、メール・ブラバーサと呼ばれる如来、マンジュ・ドヴァジャと呼ばれる如来がいるが、シャーリプトラよ、このような〔如来達〕をはじめとして、東方におけるガンジス河の砂の如き諸仏・諸世尊は舌を以て各々の仏国土をあまねく覆って明言している (97.1-5)。

このように固有名詞を付された覚者達から、固有性・具体性を欠いた数多の覚者に言及した途端に tathāgata という語は buddha という語に取って代わられている。これはまさにその覚者が具体性・固有性を有するか有しないかという基準で buddha という語の使い分けがなされていることを如実に物語っていると言えよう¹⁴⁾。

3. 小結

ここまで L. Sukh. と S. Sukh. における覚者の用例を検討してきたが、以上の考察から知り得たことは次の二点である。

① 経典が固有名詞を有する覚者に言及する時には、bhagavat, tathāgata, arhat, samyakṣaṃbuddha といった呼称を用いるのが普通であり、buddha という呼称は原則的に使われることはなかった。例外的に韻文中においてそのような用例が認められたが、それは韻律という制約がある時に限られ¹⁵⁾、散文中では一つの例外もなく、固有名詞を有する覚者に buddha という呼称は用いられていない。

② buddha という呼称が用いられるのは固有性・具体性を欠いた覚者に言及する時に限られ、それは固有名詞がないというだけではなく、その数の多さを強調する形容句が buddha に付されることから、buddha という語で表現される覚者から固有性や具体性が抜け落ち、それらの覚者を「透明な存在」、あるいは「顔

14) S. Sukh. における、コンパウンド中の buddha の用例であるが、これに関しては L. Sukh. に比べてその数は極端に減り、類出する buddhakṣetra を除けば、buddhamanasikāra と buddhānasmṛti という二つの用例が存在するのみであるが、L. Sukh. の時と同様に、コンパウンド中の buddha の用例はここでは考察の対象としない。

15) 或いは別の可能性として、次のようなケースも考えられよう。つまり、韻文が散文よりも古形を保っているとすれば、より古い時代においては、固有名詞を有する覚者が buddha という呼称でも呼ばれていたが、時代が下るにつれて、ここで考察したような使い分けが意識されるようになった、というようなケースである。これは経典の成立に関する複雑な問題をはらんでいるため、現時点でこれ以上の深入りは出来ない。問題提起に留めたい。

の「見えない存在」にしている。

このような用例を見る時、L. Sukh. や S. Sukh. の経典作者が、その覚者に具体性・固有性があるかないかという基準で buddha という語の使い分けをしていたであろうことはまず間違いのない事実と思われる。

今後の課題としては、初期経典や Skt. で残されている大乘経典所説の buddha の用例を整理することにより、このような使い分けが浄土経典に限ったことなのか、あるいは他の大乘経典にも共通して見られる傾向なのか、またそうだとしたらいつ頃このような使い分けが行われるようになったのか、またそのような使い分けをする理由は何だったか等の問題を明らかにする必要があるだろう¹⁶⁾。

16) ここでは Skt. 原典に見られる buddha の用例を検討するに留まり、歴史的な展開に関しては一切触れなかったが、この問題は避けて通ることの出来ない重要な問題である。勿論、buddha と言えば、初期経典では釈尊を意味するわけであるから、その当初から buddha が「顔の見えない存在」であったはずはない。後世になって初めて、何らかの理由でそのような使い分けがなされるようになったとも考えられるが、我々の手元にある無量寿経や阿弥陀経の Skt. 原典の成立自体はそれほど古くは遡らないであろうから、例えば無量寿経の最古の漢訳である『阿弥陀三耶三仏薩樓檀過度人道経』の依拠した Skt. 原典が制作された時代においてすでにこのような buddha の用法が確立していたかどうかは疑問である。その時代の Skt. 原典から比較すればかなり新しい現存の Skt. 原典においてすら、このような buddha の用法は100%の使い分けがなされていたわけではなく、若干の例外としてすでに指摘したように、「顔の見えない buddha」を tathāgata や samyakusambuddha 等の呼称で表現したり、また韻文中では固有名詞を有する覚者を buddha と呼ぶケースもあった。いかなる Skt. 原典もそれが編纂された時代自体は比較的新しくても、それが古い要素を含んでいる可能性は十分に考えられる。このような前提に立てば、「顔の見えない buddha」が tathāgata や samyakusambuddha 等の呼称で表現されたり、固有名詞を有する覚者を buddha と呼ぶ用例は、まだこのような buddha の使い分けが明確に確立する前の名残とも捉えることも出来るのである。この問題の解明には漢訳諸訳の詳細な比較研究等が必要となろう。